

# 國學院大學學術情報リポジトリ

朝鮮青年社刊行の朝鮮童話集・昔話集に関する研究：  
許南麒（許集）を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金,広植 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000037">https://doi.org/10.57529/0002000037</a>

# 朝鮮青年社刊行の 朝鮮童話集・昔話集に関する研究 —許南麒（許集）を中心に

金 広植

## はじめに

日本において韓国・朝鮮の童話や昔話が知られるようになったのは、在日コリアンが大きな役割を果たしたからである。なお、在日コリアンの出版社の中でも太平出版社、朝鮮青年社、学友書房の役割が大きい。それに関する研究はほとんどなされていないのが現状である。太平出版社社長の崔容徳は、『朝鮮の民話』（松谷みよ子・瀬川拓男再話、全3冊、1972年）に先立ち、申来鉉『朝鮮の神話と伝説』（1971年）を刊行している。申来鉉（1915～？）は東京で『朝鮮の神話と伝説』（一杉書店、1943年、以下1943年版）を刊行し、平壤で『郷土伝説集』（国立出版社、1957年、朝鮮語）を刊行している。崔容徳は1943年版を1971年に復刻する際、申と連絡を取ろうとしたが、連絡がつかず「刊行者のあとがき」に連絡するように依頼している。その15年後の1986年に平壤の申から東京へ手紙が届く。申は平壤の代表的な教育出版社である金星青年出版社に勤務していたが、この出版をきっかけに民話や伝説の分野で朝鮮と日本の共同研究を願っていた<sup>1</sup>。

申の素朴な希望は、戦後の日朝関係の中でいまだに実現していないが、在日コリアンは数多くの昔話集を日本で刊行している。特に、在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総連）傘下の朝鮮青年社と学友書房は多くの書籍を刊行しており、その中で昔話集や童話集も刊行している。しかし、先行研究ではこれらの書籍については研究されていなかったが、筆者は研究

---

<sup>1</sup> 拙著『申来鉉の朝鮮郷土伝説集』召命出版、ソウル、2020年、19頁。韓相言「韓相言の本と人びと」『NEWSIS』2021年1月31日

([https://mobile.newsis.com/view.html?ar\\_id=NISX20210126\\_0001318591](https://mobile.newsis.com/view.html?ar_id=NISX20210126_0001318591), 2022年8月29日最終アクセス)

の成果として前稿で学友書房の刊行状況を明らかにすることができた<sup>2</sup>。本稿では朝鮮青年社を中心にその刊行状況を考察し、その内容と意味を分析したい。特に、在日詩人として著名な許南麒（許集）が児童教育のために朝鮮民話をどのように再話したのかを考察したい。

## 1、「朝鮮青年社児童文庫」について

朝鮮青年社は早くから朝鮮の説話に関心を示し、1963年に『朝鮮の名人』（科学院出版社、1962年）<sup>3</sup>を、1967年に『イエンマル（昔話）』（朝鮮文学芸術総同盟出版社、1964年）を朝鮮語で復刻している。

学友書房と同じく、朝鮮青年社は1980年前後に多くの朝鮮童話集や昔話集を刊行しているが、その大多数は朝鮮語で刊行している。学友書房は主に朝鮮学校の教科書と各種参考書・教材をはじめ、辞典類、児童・生徒向けの雑誌、子供向け絵本などを発行する教育図書専門の出版社である。1949年にウリトナム（私たちの友たち）社として創立され、2003～2006年度にかけて初・中・高級部合わせて118種の教科書を新たに作成している<sup>4</sup>。一方、朝鮮青年社はより多様なテーマの本を出しており、日本語の童話集や昔話集も出している。その代表的なものが「朝鮮名作絵本シリーズ（全5冊、1982～1991年）」である。このシリーズは在日を代表する作家によって朝鮮の代表的な作品『洪吉童』（洪永佑）、『フンブとノルブ』（韓丘庸・金正愛）、『天馬とにじのぼち』（梁裕子・蔡峻）、『りんごのおくりもの』（李錦王・朴民宜）、『あおがえる』（同）を出し、広く読まれてきた<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> 拙稿「朝鮮民主主義人民共和国における説話集の刊行過程に関する考察」『昔話伝説研究』40、2021年。拙稿「在日朝鮮人の昔話絵本の活用」『溯上古典研究』75、溯上古典研究会、2021年。拙著『北韓説話の新しい理解』民俗苑、ソウル、2022年。

<sup>3</sup> また朝鮮青年社は、朝鮮大学校教授の金哲央『朝鮮名士物語』（1984年、1976年10月～1977年12月に『朝鮮時報』に連載）をはじめ、朝鮮語で『人物から見る朝鮮歴史 愛国名人』全4冊（第3巻科学・技術編、第4巻文化・芸術編、1999～2000年）も刊行している。

<sup>4</sup> 国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編『在日コリアン辞典』明石書店、2010年、65～66頁。

<sup>5</sup> 『洪吉童』は日本語版と韓国語版が同時に出ている。その後は日本語で刊行し、後半部に小さい文字で朝鮮語文を付け加えている。詳細は、拙稿「在日朝鮮人作家、李錦王の『りんごのおくりもの』に関する考察」『学芸国語国文学』55号、2023年をご参照頂きたい。

一方、朝鮮語で刊行された童話集や昔話集はその全貌が明らかになっていない。幸いに韓丘庸によってその多くが整理されてきたが、日本語の作品を中心にまとめられているだけである<sup>6</sup>。以下では朝鮮青年社の単行本を中心にその刊行状況を考察してみたい。

朝鮮青年社が朝鮮童話集や昔話集の刊行に本格的に取り組んだのは1978年からである。同年に「青年社児童文庫」として『朝鮮童話集』第1巻をはじめ、『朝鮮民話集』第1巻を刊行している。その裏表紙には「初級部少年団員の学習と少年団生活に役立つために」「青年社児童文庫」を刊行したと記載されている。また「この児童文庫には我が国の童話と昔から伝わる朝鮮の面白くて有益な昔話を多く収録し」たので、このシリーズを通して「正しいことと間違っていることがよく分かり、優しく懐かしい朝鮮語を大いに学習できることを願う」と述べている。朝鮮青年社は日本に住む朝鮮児童の言葉と情緒を育むために、早くから昔話のストーリーテリングの可能性に注目していたことが分かる。

このシリーズは初等教育の3年生以上の生徒向けに刊行されている。「3、4年生には少し難しい単語が多いので、先生や父兄が学校や家庭で読み聞かせる」ことを勧めている。また「5、6年生には基本的に自力で読み、難しい単語は辞書を引いたり、説明してあげたりしてください」と勧めている。実際に、この二冊には「初級部3,4,5,6年生用」と書かれているが、その後の本はいずれも「初級部4,5,6年生用」となっている。

このように「青年社児童文庫」シリーズは、3年生以上の小学生を想定して、「朝鮮の面白くて有益な昔話」を学習することで、朝鮮語を楽しく学習するとともに教訓的な内容を通して正しい人格の形成を目指していたことが分かる。

また出版社は、「今学期の『朝鮮童話集』第1巻を皮切りにして、学期毎に1冊ずつ児童文庫」を出し、「後期は人民たちの中で伝わった興味深い昔話の収録した『朝鮮民話集』を、来年は『朝鮮童話集』を続けて刊

---

<sup>6</sup> 韓丘庸「朝鮮を描いた児童文学作品年表」『朝鮮のある児童文学風景』あまのはしだて出版、1999年。同『朝鮮を理解する児童文学100冊の本』エスエル出版会、1988年。

行する」と予告している<sup>7</sup>。実際に1978年7月に『朝鮮童話集』第1巻を、1978年12月に『朝鮮民話集』第1巻と『朝鮮童話集』第2巻を刊行している。その後『朝鮮童話集』は1986年まで全17冊が刊行されている。しかし、『朝鮮民話集』は第1巻のみが刊行されている。

## 2、「朝鮮童話集」について

まず、「朝鮮童話集」を考察したい。「青年社児童文庫」は朝鮮語で刊行されたこともあり、その収録や内容については研究されていない。「朝鮮童話集」の書誌は次の通りである。

- 1.許南麒編、洪永佑絵『蝶と雄鶏』1978年（10話、金日成、玄在徳、車勇九らの作品）。
- 2.朴民宜絵『建て直したズワイガニの家』1979年（5話、裊風、金デスン、崔諾瑞、元道興）。
- 3.朴民宜絵『二人の將軍の話』1980年（6話）。
- 4.朴民宜・尹晃一絵『不思議な山ぶどう』1980年（4話）。
- 5.朴民宜・尹晃一絵『補薬を食べたマクドン鹿』1981年（5話）。
- 6.朴民宜・尹晃一絵『水に落ちた地主』1981年（5話）。
- 7.洪永佑・尹晃一絵『羽についた鈴』1981年（5話、金博文、高デスン、許元吉、黄玲巫）
- 8.韓丘庸編、朴民宜絵『ソデヂ伝』1982年（1話）
- 9.尹晃一・崔春龍絵『勇盟山の若い將軍』1983年（4話）
- 10.尹晃一・崔春龍絵『おでこの禿げたオウム』1983年（4話）
- 11.尹晃一・崔春龍・金正愛絵『栗が出る壺』1983年（4話）
- 12.朴民宜・金正愛絵『十番目の大門』1984年（4話）
- 13.桂哲雄・尹晃一絵『羽のついた竜馬』1984年（3話）
- 14.尹晃一・崔春龍絵『アルラクモグラの願い』1984年（4話）
- 15.尹晃一・金正愛絵『敵を討った角ヒバリ』1985年（4話）

---

<sup>7</sup> 許南麒編『蝶と雄鶏』朝鮮童話集1、朝鮮青年社、1978年。同『昔話袋』朝鮮民話集1、1978年、裏表紙。

16.尹晃一・金正愛絵『赤い玉』1985年（4話）

17.金正愛・洪ギョル・朴ヒョンヒョ絵『タンチョウヅルがもらった金色の羽』1986年（4話）

上記のように朝鮮青年社は、全17巻の朝鮮童話集（A5判）を出しているが、第8巻の『ソデヂ伝』を除いては1巻に3話から10話の童話を収録している。テキストの多くは平壤で刊行された朝鮮作家同盟機関誌『児童文学』などに収録された童話を参考にしたと思われるが、表紙や挿絵はすべて在日作家が担当している。第1、2、7巻では童話作家の名前が記載されているが、それ以外は書かれていない。例えば、第11巻の崔ウネ「栗が出る壺」は『児童文学』1982年6月号に、第14巻の韓テス（1942～？）「アルラクモグラの願い」は1983年10月号に、第15巻の高デソン「敵を討った角ヒバリ」は1984年4月号に、第16巻の金ヨンサム「赤い玉」は1984年2月号に、第17巻の崔忠雄（1945～？）「タンチョウヅルがもらった金色の羽」は1985年1月号に掲載されたもので、第12巻の「十番目の大門」は金ヒョンウンによるものである。

挿絵は朴民宜（1947～）と尹晃一（1957～）が最も多く担当している。朴民宜は造形作家・童画作家で、前述した李錦玉文の『あおがえる』と『りんごのおくりもの』をはじめ、『よわむしごうけつ』（太平出版社、1981年）、『さんねん峠』（岩崎書店、同年）、『へらない稲たば』（同、1985年）の挿絵を担当しており、その中で「さんねん峠」と「へらない稲たば」は日本の小学校教科書にも収録されて広く知られている<sup>8</sup>。

朴民宜が朝鮮の情緒をふんだんに盛り込んだ伝統的な挿絵を入れることと比べ、尹晃一は漫画風のタッチで面白くてユーモラスに描いている。尹晃一は漫画家・童画作家で、早くから漫画を取り入れて『まんが朝鮮昔話』（1977年）に「牛に化けたなまけ者」「下男の知恵」などの8編を収録している<sup>9</sup>。

---

<sup>8</sup> 詳細は前掲拙稿「在日朝鮮人の昔話絵本の活用」2021年。拙稿「小学校国語教科書に収録された韓国・朝鮮の昔話」（『ハヌルハウス』69号、2021年）をご参照頂きたい。

<sup>9</sup> 尹晃一『まんが朝鮮昔話』朝鮮青年社、1977年（1982年2刷）。同『まんが朝鮮昔話2』朝鮮青年社、1991年。

「朝鮮童話集」第1巻は許南麒が、第8巻は韓丘庸が編著したもので、残りの15冊は編者が書かれていない。「朝鮮童話集」は韓丘庸が、「朝鮮民話集」は許南麒が深くかかわっていたと思われる。許南麒については後述したい。韓丘庸（1934～）は児童文学者・評論家で、『海への童話』（牧書店、1973年）などの童話を発表する傍ら、『日本児童文学』『子どもの本棚』などに数多くの評論を発表している。また、韓国・朝鮮の童話（『韓国短篇童話集 夜中に見た靴』エスエル出版会、1988年）や昔話（『にわとりを鳳凰だといって売ったキムソンダル』素人社、2001年、『痛快!!キム・ソンダル』海風社、2010年）などを紹介している。

第8巻『ソデヂ伝』は、韓が編集および解説を担当している。「ソデヂ伝」は、朝鮮時代の年代未詳の古典小説（漢文筆写本）でそのあらすじは次の通りである。凶作で小兎山の鼠たちは打開策を考えていたが、その中で大きな鼠の「ソデヂ（鼠大州）」が南嶽山のリス（鼯南州）に50匹の鼠をつれて行った。リスは宴会を楽しんで酔って寝ていたので、ソデヂらは粟50石などを盗んでいった。リスはソデヂらを告訴する。ソデヂは地方官をうまく騙して、ご馳走になるが、リスは誣告罪で告発される。その後、ソデヂの子孫は繁栄したが人びとに憎まれ、リスは善良で人びとに愛されたという話である。

韓は次のような内容に易しく翻案している。小兎山の鼠たちは凶作が続いたので働かずに盗賊をしていたが、頭の「ソデヂ（徐大鼠）」<sup>10</sup>は働きのリスの倉庫から盗みをする。リスが地方官に告発して裁判を受ける。しかし、刑吏などに賄賂を使った鼠たちは地方官をうまく騙して、ご馳走になるが、リスは鞭で打たれる。その後も支配階級（両班）のソデヂは盗みを続け、農民のリスは山奥に逃げて幸せに暮らした。ソデヂの子孫は繁栄したが人びとに憎まれ、リスは善良で人びとに愛されたという。この話は当時の人間社会を鼠やリスに喩えたもので、支配階級（鼠）の腐敗や偽善とともに、裁判官の無能力を暴露している。

北朝鮮で「ソデヂ伝」は早くから白ジュンソンの翻案で『文学新聞』

---

<sup>10</sup> 徐大鼠（鼠大州）は朝鮮語音読の当て字（音通）である。鼯南州はリスの朝鮮語「タラムヂ」の当て字である。

(1962年11月2日～9日)に連載されている。また「朝鮮児童文学文庫」(全19冊、1964～1966)第4巻、金信福・白ジュンソン潤色『我が国(ウリナラ)古典小説編(寓意篇)』(児童図書出版社、1965年)に「トッキ(ウサギ)伝」や「裁判を受ける鼠」とともに「ソデヂ伝」を収録している。韓は解説で、「トッキ伝」と「裁判を受ける鼠」とともに、「ソデヂ伝」を代表的な古典文学として列挙し、「白ジュンソン先生が潤色したものをこの児童文庫に合わせて多少の手を加えた」と述べており、児童図書出版社版を参照したことが分かる<sup>11</sup>。韓は「この本を通してソデヂや地方官のような当時の支配階級が如何に残酷で無能であったかが分かり、リスたちのように正義のために闘う人民はいつも勝利するということが分かる」と述べている。

また、北朝鮮では1977年を前後に「金日成が聞かせた童話」が数多く刊行されている<sup>12</sup>。学友書房も1970年代中盤以降に朝鮮語で児童用絵本(B5判)を百冊以上刊行しているが、『遊んで食べていた豚』(1975年)を刊行している。その後、学友書房は1987年から2001年にかけて「金正日が聞かせた童話集」(8冊)と「金正淑が聞かせた童話集」(6冊)を延べ14冊刊行している<sup>13</sup>。学友書房が「金正日と金正淑が聞かせた童話」を刊行したことに対し、朝鮮青年社は「金日成が聞かせた童話」を収録している。「朝鮮青年社児童文庫」の中で、第1巻『蝶と雄鶏』(1978年)、第3巻『二人の将軍の話』(1980年)、第10巻『おでこの禿げたオウム』(同年)、第13巻『羽のついた竜馬』(1984年)を刊行している。

最後に「朝鮮童話集」のなかには、朝鮮の昔話も一部収録されている。「朝鮮童話集」に収録されている童話の多くは創作童話や寓話などで、動物が登場する話が多数である。例えば、第5巻には「山参を採った山兎」「補薬を食べたマクドン鹿」「水中に建てたカワガラスの家」「蓮沼のカエル兄弟」「フクロウとツミ」が収録され、すべての話の中で動物が登場する。北朝鮮では早くから寓話が重要視され、民間説話の中でも寓話

---

<sup>11</sup> 韓丘庸編、朴民宜絵『ソデヂ伝』朝鮮青年社、1982年、序文。

<sup>12</sup> 前掲拙著『北韓説話の新しい理解』2022年、161頁。

<sup>13</sup> 同上、189～190頁。



が広く活用されていて、「朝鮮童話集」もその影響を受けたと思われる。しかし、童話の中の一部は朝鮮昔話を再話したもの、昔話のような形式を持つ話が収録されている。許南麒編の第1巻に収録されている昔話は後述したい。

第15巻に収録されている「チャムネとバンネ」は、まずしいが勤勉なチャムネと怠け者のバンネという女の子の話である。孤児のチャムネは外出するので、バンネにカイコを見てくれるよう頼んだが、怠け者のバンネのせいで、鶏に食べられてしまう。幸いにカイコ一つだけが生き残って、それを大切に育てたら兎くらい大きくなって、たくさん産繭した。カイコはトビのように大きな蝶になり、カイコをたくさん産んだ。それを村の人びとに分けてあげ、一つだけを大事に育てた。バンネは、初めはお金持ちになろうと思って頑張ったものの、すぐに怠けてしまう。それを見たチャムネは桑の葉を与えたが、バンネはかまわないでと拒否した。バンネのカイコはさらに小さくなってしまった。バンネが悔い改め、大切にカイコを育てて勤勉な子になったという話である。これは金ジンヨルが『児童文学』（1984年3月号）に発表した内容で、昔話のモチーフを取り入れて教訓的な話に仕上げている。

「朝鮮童話集」では欲深い地主が滅びる話が登場するが、いずれも昔話を再話したものである。まず、第6巻の「水に落ちた地主」は、欲深い黄地主と虐げられている下男のオドンイ（15歳）の話である。心優しいオドンイは、金魚を助けて母の誕生日に貝やコメを得る。その話を聞いて真似をした地主は、金魚を求めて水に溺れるという内容である。

第10巻に収録されている「馬鳴村に宿っている伝説」も欲深い黄地主に関わる九月山の伝説である。虐げられていた作男のボムチョリは、柴刈りから帰る途中倒れたが、白髪のお爺さんから山イチゴを二つもらう。一つは自分が食べて、もう一つは妹のコスニに食べさせると、妹は一時元気になる。ボムチョリは村の人びとのためにまた山イチゴを求めて山に登り苦労の末お爺さんに再会する。お爺さんは村の東の池の木を100日間伐るように命じる。ボムチョリはもらった金の刀で行いながら体を鍛えていく。妹はまた病気になり、長寿山の薬草を食べない

といけなくなったので、ボムチョリがそれを採りに行こうとする。妹はそれに反対して手紙を残して家を出る。ボムチョリが木を伐り続けると、池の水が湧いてくる。地主は木を伐ることを妨害して、ボムチョリに矢を放って殺す。その時、お爺さんが送ってくれた竜馬が泣いて豪雨が降り、地主とその部下が水に流されてしまう。村の人びとは地主の搾取から逃れて幸せに暮らすようになり、村で竜馬が泣いたので馬鳴村と呼ばれるようになった。この話は児童文学者の盧孝植（1952～？）が『児童文学』（1982年10月号）に発表したもので、伝説に基づいて創作した童話である。

また、第12巻に収録されている「孝童と黒いヒヨコ」も欲深い姜地主と優しく勤勉な作男の孝童の話であるが、これも児童文学者の崔諾瑞（1933～？）が『児童文学』（1982年5月号）に発表したものである。第14巻の「腰の折れた地主」も悪い黄地主と心優しいスニの話であるが、これも児童文学者の朴ミョンファが『児童文学』（1983年5月号）に発表したものを参考にしてしている。

このように「朝鮮童話集」は、平壤で刊行された『児童文学』などを参考にして、童話集を構成していたことが分かる。また、欲深い地主＝資本家を批判的に捉える話も収録していることが分かる。

### 3、「朝鮮民話集」について

朝鮮青年社は朝鮮童話集をはじめ、朝鮮人物伝、朝鮮民話集を多数出版している。

まず、許南麒編、洪永佑・朴民宜絵『朝鮮民話集1 昔話袋』（1978年）には朝鮮の昔話が12話収録されている。『朝鮮童話集』は1978年から1986年にかけて17冊が刊行されているが、『朝鮮民話集』は1冊にとどまっている。その後『朝鮮説話集1 伝えられなかった名薬』（蘇瑩鎬編、洪永佑・金正愛絵、1982年、14話）、『許南麒民話集1 トケビのこんぼう』（許南麒文、洪永佑絵、1985年、13話）、『許南麒民話集2 トラのしっぽ』（許南麒文、洪永佑絵、1986年、11話）が刊行されている。

北朝鮮では1968年から1970年代半ばにかけていわゆる「図書整理事

業」(1967年5・25教示の後続措置)が行われ、古典や伝統に関わる書籍が大量に処分された時期があり、1966年までに刊行された朝鮮昔話集を確認することは難しい<sup>14</sup>。つまり、1967年から1983年まで朝鮮昔話集の空白期間が存在する。平壤では1984年の『昔話集七将帥』(金星青年出版社)を皮切りに再び昔話集が刊行されている。先行研究では1966年まで刊行された朝鮮昔話集を確認できず、1980年代以降の昔話集を中心に研究してきたという致命的な問題がある。筆者は次の5冊を発掘することができ、初期の成果を復元できた。

- ① 『昔話 柳の笛』(民主青年社、1955年)
- ② 申来鉉『郷土伝説集』(国立出版社、1957年)<sup>15</sup>
- ③ 金ウオンピル編『我が国の昔話』(児童図書出版社、1958年)<sup>16</sup>
- ④ 『昔話 七将帥』(民青出版社、1963年)
- ⑤ 金グァンヒョク編『朝鮮児童文学文庫(1) 我が国の昔話(上)』(児童図書出版社、1965年)

この5冊はいずれも朝鮮語で書かれており、③と⑤は昔話研究において欠かせない重要な資料集である。一方筆者は、③と⑤とを東京・学友書房の『我が国の昔話』全六巻(1980～1984年)と比較研究することで、『朝鮮児童文学文庫(2) 我が国の昔話(中)』(学生少年出版社、1966年)が刊行された可能性を導き出すことができた<sup>17</sup>。

また、筆者は学友書房と朝鮮青年社の昔話集は非常に重要な資料集だと考えている。理由の一つ目は在日出版社による日本への朝鮮説話の紹介という側面があるためである。前述したように、先行研究では学友書房と朝鮮青年社が刊行した童話集や昔話集について研究されていないが、それが日本の朝鮮昔話の普及に与えた影響は大きいといえる。

二つ目は1966年まで北朝鮮で刊行された昔話集を復元できる資料と

---

<sup>14</sup> 拙稿「解題」、金広植編『北韓最初(1958)の民譚集「我が国の昔話」』民俗苑、2021年。

<sup>15</sup> 前掲拙著『申来鉉の朝鮮郷土伝説集』2020年。

<sup>16</sup> 前掲拙著『北韓最初(1958)の民譚集「我が国の昔話」』2021年。

<sup>17</sup> 詳細は前掲拙著『北韓説話の新しい理解』の第1章をご参照頂きたい。

して価値が高い点である。前述したように北朝鮮で1966年まで刊行された昔話集の多くが処分されており、今日はその全貌を捉えることが難しい状況である。幸いに1980年前後に学友書房と朝鮮青年社は、1966年まで北朝鮮で刊行された昔話集を参考にして、朝鮮昔話集を刊行しており、重要な役割を果たしている。

三つ目に在日の出版は、1980年以降の北朝鮮における昔話集刊行の始発点になるという点で注目に値する。前述したように北朝鮮では、1967年から1983年までにかけて刊行された朝鮮昔話集は確認されていない。北朝鮮では1984年の『七将帥』（金星青年出版社）を皮切りに昔話集が相次いで刊行されている。一方、学友書房と朝鮮青年社は、以下のように1980年前後に数多くの朝鮮昔話を刊行しており、北朝鮮にも一定の影響を与えたと思われる。前述の尹晃一『まんが朝鮮昔話』（1977年）と許集編『朝鮮のむかしばなし』（朝鮮青年社、1979年）は、日本語の書籍であるが、以下はいずれも朝鮮語で刊行された昔話集である。

『我が国の昔話』全六巻、学友書房、1980～1984年。

許南麒編、洪永佑・朴民宜絵『朝鮮民話集 1 昔話袋』朝鮮青年社、1978年。

まず、尹晃一『まんが朝鮮昔話』には「1、牛に化けたなまけ者」「2、下男の知恵」「3、伝わらなかった妙薬」「4、とんち小僧」「5、割られた鏡」「6、もちを食う仏像」「7、孝女とガマ」「8、山人蔘を掘りに行った三人」の8編が収録されている。このなかで、3、4、6～8は、前述の復刻版『イエンマル（昔話）』（1964年）を参照している。『イエンマル』は1967年に朝鮮青年社が復刻して、その後朝鮮昔話の普及に大きな影響を及ぼしたことが分かる。

#### 4、許南麒の童話集・昔話集

朝鮮語で刊行された『我が国の昔話』全六巻（1980～1984年）は前稿で考察したので、以下では1978年に刊行された許南麒の民話集（昔話集）と童話集を中心に分析したい。

許南麒（1918～1988年）は、解放直後に朝鮮語と日本語で詩を書いた代表的な愛国的・革命的詩人としてよく知られている<sup>18</sup>。詩の翻訳<sup>19</sup>や戯曲<sup>20</sup>については研究されているが、昔話集に関する研究はなされていない。

許は、1918年に釜山亀浦で生まれて1937年に釜山第二商業学校を卒業後、治安維持法違反で逮捕される。1939年日本に渡って日本大学芸術学部映画科に入学し、朝鮮演劇団体「形象座」を組織し、戯曲を書いて演劇に取り組んだが弾圧を受ける。1940年に中央大学法学部に転校して1942年に卒業している。1945年に在日朝鮮人聯盟（朝聯）文化部で朝鮮語教科書を編纂し、1946年に河口朝聯小学校校長、1948年に朝聯文化部次長、1949年に『民主朝鮮』編集長、1956年に朝鮮大学校講師、1957年に在日朝鮮文学会委員長、1959年に在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）委員長、1966年に総聯中央常任委員会副議長に就任している。1974年に健康状態の悪化で副議長から退くが、直後に文芸同委員長に再選される。日本語詩集『朝鮮冬物語』（朝日書房、1949年）、朝鮮語詩集『祖国に向かって』（朝鮮文学芸術総同盟、1962年）などを刊行している<sup>21</sup>。

許の主要な作品は、磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集 第2巻 許南麒』（勉誠出版、2006年）に収められているが、昔話集や童話集に関

---

<sup>18</sup> 任正赫「許南麒と七冊の日本語詩集」『コリアン・スタディーズ』10、国際高麗学会日本支部、2022年。李ジョンソク「韓国文学と在日朝鮮人文学、その親縁性と距離」『比較文学』41、韓国比較文学会、2007年、258頁。李ギョンス「在日同胞の韓国語詩文学の展開過程」『韓中人文研究』14、韓中人文学会、2005年、360頁。340頁。金ウンギョ「在日ディアスポラ詩人の系譜、1945～1979」『人文研究』55、嶺南大学校、2008年などを参照。

<sup>19</sup> 呉ミジョン「戦後日本の北韓文学の紹介と受容」『ウリ語文研究』40、ウリ語文学会、2011年。

<sup>20</sup> 呉ヒョンファ「在日朝鮮人の戯曲の創作方法論の研究」『韓国文学理論と批評』13、韓国文学理論と批評学会、2009年、545～547頁。

<sup>21</sup> 孫志遠編『鶏は鳴かすにはいられない 許南麒物語』朝鮮青年社、1993年。河相一「在日ディアスポラ詩人許南麒の研究」『批評文学』34、韓国批評文学会、2009年、371頁。

する内容は見当たらない。許の経歴は、孫志遠編『鶏は鳴かすにはいられない 許南麒物語』(朝鮮青年社、1993年)に詳しい。孫志遠によると、許は作品の発表とともに翻訳にも力を入れ、『解放新聞』(後の『朝鮮新報』)と『朝鮮中央時報』に朝鮮の名作や古典文学を紹介したことに言及し、次のように付け加えている。

一九七〇年代に入り、許南麒は朝鮮の民話や児童文学の解説と編集も手がけた。日本で生まれ育った朝鮮の子供たちの教養ブックとして編さんした『朝鮮むかしばなし』や『옛이야기 (昔話)』などは、いまでも初級学生たちに親しまれている<sup>22</sup>。

『朝鮮むかしばなし』は『朝鮮のむかしばなし』、『옛이야기 (昔話)』は『옛이야기 주머니 (昔話袋)』の書き間違いである<sup>23</sup>。『朝鮮のむかしばなし』の「著作紹介」には次のように書かれている。

許集 (ホ・ジブ)

1918年、朝鮮で生まれる。

著述業。

著書に『韓国発禁詩集』(二月社)がある<sup>24</sup>。

許集は実は許南麒である。許南麒は、1978年以降に日本で生まれた朝鮮の子供たちのために昔話集を刊行している。日本語で『朝鮮のむかしばなし』を刊行して、以下のように朝鮮語で四つの昔話集を出している。

許南麒編、洪永佑絵『朝鮮童話集 1 蝶と雄鶏』1978年。

許南麒編、洪永佑・朴民宜絵『朝鮮民話集 1 昔話袋』1978年。

許南麒文、洪永佑絵『許南麒民話集 1 トケビのこんぼう』1985年。

---

<sup>22</sup> 孫志遠編『鶏は鳴かすにはいられない 許南麒物語』朝鮮青年社、1993年、145頁。

<sup>23</sup> 同上、276頁。

<sup>24</sup> 許集『朝鮮のむかしばなし』朝鮮青年社、1979年、奥付。

許南麒文、洪永佑絵『許南麒民話集 2 トラのしっぽ』1986年。

日本語版『朝鮮のむかしばなし』には「1、海の水がしょっぱいわけ」「2、海と陸の由来」「3、日蝕と月蝕」「4、五両ならわしが死ぬ」「5、においの代金」「6、青がえる」をはじめ、「32、大同江を売ったはなし」「33、首切られた義州府尹」「34、鄭万瑞の貧しさ」「35、借用証書」などの笑話を含めて延べ 35 話を収録している。後半の笑話は社会科学院口伝文学研究室『口伝文学資料集（説話篇）』（社会科学院、1964年）を参照しているが、許は『イエンマル』（1964年）、『朝鮮民話集』（外国文出版社、1959年）、孫晋泰『朝鮮民譚集』（郷土研究社、1930年）などを参照している<sup>25</sup>。以下では1978年に朝鮮語で刊行された童話集と民話集を分析したい。

まず、『朝鮮童話集 1 蝶と雄鶏』には延べ 10 話が収録されているが、それぞれの話の最後には短く「教訓を探そう」が付け加えられている。許は知恵や勤勉、協力や勇気を強調する話を中心に取り上げている。

<表 1> 『朝鮮童話集 1 蝶と雄鶏』の収録内容

	作品	出典	備考
1	蝶と雄鶏	金日成が聞かせた童話	知恵と勇気を強調
2	15歳少年に関する話	金日成が聞かせた童話	勇気を強調
3	食べて遊んでいた豚	金日成が聞かせた童話	勤勉を強調
4	サルとカニ	伝承童話	禁欲と知恵を強調
5	オスの雉とリス		勤勉を強調

<sup>25</sup> 『朝鮮民話集』（外国文出版社、1959年）については、拙稿「朝鮮民主主義人民共和国における『朝鮮民話集』の刊行とその意味」『昔話伝説研究』41号、2022年をご参照頂きたい。

6	赤いくつ	朴インボムの創作童話	調和と協力を強調、『児童文学』1956年7月号を参照
7	冬を克服したハチと花	玄在徳の創作童話	勤勉と鍛練と強調、『児童文学』1961年1月号を参照
8	トルセと熊		知恵と協力を強調、尹デグンの昔話、『児童文学』1956年8月号を参照
9	月の中の玉兎		報恩譚、兎が月で餅つきをするようになった理由
10	生き甲斐	車勇九の創作童話	自慢を警戒、内実を強調、『文学新聞』1962年5月15日を参照

<表 1>のように許は出典を記したが、「オスの雉とリス」「トルセと熊」「月の中の玉兎」は出典が記載されていない。この中で「トルセと熊」は『児童文学』（1956年8月号）を参照しているが、その他は不明である。『朝鮮童話集 1』の冒頭の三つの話は、「金日成が聞かせた童話」から収録している。「蝶と雄鶏」「15歳少年に関する話」「食べて遊んでいた豚」は、「金日成が聞かせた童話」の中でもよく知られている話で、強者に屈しない知恵と勇気や勤勉を強調している。また、有名作家の創作童話3話、昔話4話を収録している。

「サルとカニ」はサルの顔が赤くなりカニの足に毛がついた理由を語る由来譚である。意地悪いサルはいつもカニが捕った魚を横取りしていた。サルとカニが出かけていたが、道端でこうりの中の餅を見つけた。互いに餅を争ってサルは、「山の上で餅を転がして先に拾った者が食べよう」と提案した。カニはこうりの底に穴を開けて、転ぶ際に餅が落ちるように工夫した。カニは落ちた餅を拾って洞窟の中に隠れる。騙されたサルは怒って小さい洞窟の中に顔を入れると、カニは足で反撃してサルの顔の毛を取ってしまう。それでサルは顔が赤くなり、カニは毛で足を



隠すことができ狩りに役立ったという話である。

「オスの雉とリス」もオスの雉の耳が赤くなった理由を語る由来譚である。綺麗なオスの雉は外見を自慢して遊んでいたが、リスは勤勉に働いていた。冬になり飢えていた雉は、リスを訪ねて反省した様子も見せずに食料を借りようとした。食べ物に気を取られて雉は、子リスを踏んでしまう。すると、リスはちょうど持っていた小麦粉で雉の首や耳を叩いた。雉の首が白くなり、耳が赤くなったのはその時の傷跡である。許は、教訓的な話を多く収録したが、由来譚を取り入れて童話を面白く描いている。

「月の中の玉兔」は、母兔が子兔たちのためにエサを求め出かけたが、穴に落ちてしまう。ちょうど通りかかったノロジカとタヌキが穴に落ちた兔を見つけるが、力が足らず助けることができない。次にリスが穴に落ちた兔を見つける。兔はリスに自分の状況を子兔に知らせてくれと頼む。子兔たちは母を助けるために色々と工夫したが、子兔たちの力では何もできず、とうとう泣いてしまった。夜になってお月様が出てきたので、子兔たちはお月様に丈夫な縄を頼んでようやく母兔は助けられる。その後、兔たちは月に行って餅つきを行うようになったという話である。

「サルとカニ」「オスの雉とリス」「月の中の玉兔」は、出典が明かされていないが、1966年まで刊行された北朝鮮の昔話集に収録されていた可能性がきわめて高い。実際に「オスの雉とリス」は『朝鮮民話集』3巻（金星青年出版社、1989年）に、「月の中の玉兔」は『民話集 月の中の玉兔』（同、1985年）に収録されており、1966年以前の昔話集にも収録されていたと思われる。許はそれを読んで昔話を収録したと思われる。これらは初期の昔話集からの記録として貴重である。詳細な収録過程は今後の課題としたい。

<表 2> 『朝鮮民話集 1 昔話袋』の収録内容

	作品	備考
1	無知は病気である	笑話、知恵を強調
2	絵の中のトラ	笑話、知恵を強調、『口伝文学資料集』を参照。
3	昔話好きな婦人	笑話
4	くつ売りの計算	笑話、知恵を強調
5	目玉を取っていくソウル	笑話、知恵を強調、林光澈編『朝鮮民話』を参照。
6	海水がしょっぱいわけ	禁欲を強調、孫晋泰『朝鮮民譚集』を参照。
7	牛よりダメな宰相の息子	笑話、知恵を強調、『口伝文学資料集』を参照。
8	長く使う扇子	笑話、知恵を強調、林光澈編『朝鮮民話』を参照。
9	山参の効力	協力を強調
10	親孝行に感服したトラ	孝行を強調
11	どっちでも奪われるお金	笑話、知恵を強調
12	割れた硯	笑話、知恵を強調、『口伝文学資料集』に類話。

許は『朝鮮童話集 1』に昔話 4 話を、『朝鮮民話集 1』に昔話 12 話を収録したが、その出典は明かしていない。筆者は解放前後に刊行された日本語および朝鮮語の昔話集をはじめ、北朝鮮の昔話集と在日コリアンの昔話集を網羅的に対照分析した結果、<表 2>のように、孫晋泰『朝鮮

民譚集』(郷土研究社、1930年)と林光澈編『朝鮮民話』第1集(中央出版社、1950年)、先述の『口伝文学資料集(説話篇)』(社会科学院、1964年)を参照したことが確認できた。まず、<表3>のように「海水がしょっぱいわけ」は、孫の『朝鮮民譚集』を参照している。

<表3>「海水がしょっぱいわけ」の比較表

<p>孫晋泰「海水の塩い理由」1930年、30～31頁。</p>	<p>許南麒「海水がしょっぱいわけ」30～32頁。</p>
<p>昔、或る王様が宝の引臼(망)を有つてゐた。(中略)その時、一人の大泥棒がゐて、王様の引臼を盗み出し、それを船に積んで遙るか沖の方へ逃げ出した。(中略)その時は塩が非常に貴かつたので、塩を出さうと思ひ「塩でろ」と言つて(中略)塩が出て来た。(中略)その重さで船は沈んでしまつた。泥棒の死んだのは無論であるが、今でも海の中には其の引臼が間断なく廻りつゝ塩を出してゐる。それで海の水は塩いのである。 一九二三年八月十四日、咸南咸興邑張凍源(十八歳)君談。</p>	<p>昔、トラが煙草を吸つていた時代の話です。 或る王様が不思議な棍棒を持っていました。(中略)その時、欲深くずる賢い泥棒がいて、王様の棍棒を盗み出そうと企みました。(中略)泥棒の船は遙か沖に至りました。(中略)その時はちょうど塩が高く塩の値が金の値でした。 泥棒は棍棒に「塩でろ」と唱えました。(中略)どんどん塩が出てきました。(中略)とうとう船がひっくり返つて泥棒は海に溺れて死にました。(中略)海の中では塩が間断なく出てきました。この出来事があつてから海の水はしょっぱくなつたといひます。</p>

「絵の中のトラ」「牛よりダメな宰相の息子」は、『口伝文学資料集』に基づいて収録している。「割れた硯」もそれを参照した可能性が高い。

また許は、林光澈編『朝鮮民話』第1集（中央出版社、1950年）から「目玉を取っていくソウル」と「長く使う扇子」を参考にしている。<表4>のように、「長く使う扇子」は『朝鮮民話』第1集を参照している。

<表4> 「長く使う扇子」の比較表

<p>「三代を使う扇子」『朝鮮民話』第1集、1950年、27頁。</p>	<p>許南麒「長く使う扇子」44～46頁。</p>
<p>ある所に次第に生活が傾いていく農夫が住んでいた。彼は自分の父から受け継いだ少ない畑がわずか残っていた。(中略)「私なら50年は使います」と次男が答えた。(中略)「私なら三代は使います」と三男が答えた。彼によると、扇子は開いておくだけで、頭を懸命に振ると孫の代までは使えるという。(後略)</p>	<p>ある所に次第に生活が傾いていく貧しい農夫が住んでいました。この農夫は自分の先祖から受け継いだ少ない畑がもうわずか残っていました。(中略)「私なら50年は使います」。(中略)「10年や50年って何ですか。私なら三代は使います」。三男がこう答えました。彼によると、扇子は開いて、扇子の代わりに頭を懸命に振ると孫の代までは使えるということです。(後略)</p>

筆者は、戦前の昔話集と北朝鮮の昔話集を長い時間にかけて広く対照分析してきたが、その他の出典を見つけることはできなかった。今後さらなる調査が求められるが、1918年朝鮮生まれの許は自分の記憶力を駆使して昔話集を編んだ可能性もあると思われる。<表2>のように許は、童話集では北朝鮮の童話を参考にしているが、昔話集では笑話を多く取り入れて、在日の児童たちに向けて楽しく学んで明るく生きる知恵を授けている。許は童話集と違って、昔話集では自分の記憶なども活用して昔話集を編んだと思われる。

## おわりに

北朝鮮では 1967 年から 1983 年まで朝鮮昔話集が刊行されていない。それに代わって北朝鮮では、1977 年前後に朝鮮昔話のモチーフを活用した「金日成が聞かせた童話」「金正日が聞かせた童話」が数多く刊行されている。そのような状況をいち早く捉えた許南麒は、童話集では「金日成が聞かせた童話」(3 話)を取り入れながらも、創作童話(3 話)とともに朝鮮昔話(4 話)を収録している。また、昔話集では笑話を多く取り上げて、昔話の面白さを在日の児童に向けて紹介している。

1960 年前後における許の詩文学は、北朝鮮文学の延長線上で革命的・愛国的な内容を貫いており、在日の独自性と自律性を失った目的文学に傾倒していったと評価されるが<sup>26</sup>、彼の昔話集は在日の児童に向かっていと評価できる。本稿では、1980 年前後に朝鮮青年社で童話集と民話集を同時に刊行したことに着目し、その刊行に大きな役割を果たした許の昔話を中心にその内容を考察した。1918 年生まれの許は、1978 年から 1986 年という晩年に昔話の再話に取り組んでいる。1974 年に健康状態の悪化で副議長から退いて以降、許は昔話に関心を向けていたことが確認できる。一線を退いて時間的にも余裕ができた許は、孫たちと接する機会も増えただろう。ちょうど、許がお祖父さん世代として、孫の世代のために晩年に取り組んだ作業が昔話集の刊行であったはずである。今回は 1978 年に朝鮮語で刊行された資料集を中心に分析したが、学友書房と朝鮮青年社を含めて、在日コリアンの昔話の全体像に関する考察は今後の課題としたい。

---

<sup>26</sup> 河相一「在日ディアスポラ詩人許南麒の研究」、前掲論文、2009 年、384 頁。